
タラスクス～朝の病名～？ - 1

鳥海きりう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タラスクス〜朝の病名〜？ 1

【Nコード】

N 8 7 9 3 P

【作者名】

鳥海きりう

【あらすじ】

史上最大の敵が聖都に迫る。ヤノシュ敗北の報を受け、空戦装備のタラスクスで緊急発進する朝。しかし敵の圧倒的なパワーと装甲、そして恐るべき新兵器の前に敗北し、神耶竜機師団も小さくない損害を被る。ヤノシュと共に聖都直掩の任につく朝が出会った一人のメイド——さんが、朝の心に天国よりも美しい光と、地獄よりも深い闇を落とす——。

？・もしもあなたが愛する人に打たれたら

？・もしもあなたが愛する人に打たれたら

震動。

「…来たか」

「か、閣下！ どうぞお退きを！」

「お前が退け。剣士団は市街地の救助に回している。俺が退けば、奴は我が公都が滅びるまで暴れるじゃろう」

「し、しかしお一人では！」

「——そうだな。スケイドがいれば連れてきたかも知れんな」

「は…？」

「俺《わし》のミスじゃ。もう地竜は滅びたと思い込んでいたがために、団の連中に対地竜戦の手ほどきをしていなかった。今の剣士団には、あの地竜と戦える者はおらん。勝つどころか、戦うことさえ出来ずに潰されるだけじゃろう。せつかく我が軍団に誇りを持って入団した剣士達を、そんな無様な戦いで死なせられん。これは俺のミスの清算じゃ」

「し、しかし！」

「来るぞ！ 退けい！」

再び襲った震動が、街の中央に聳え立つ城を崩壊させた。

+

私は、レギン公国の刑務所に来ていた。

政治犯収容所の中でも、一番奥にある独房——そこが今日、私が目指す部屋。

「カルティア」

その前に立ち、ドア越しに声をかける。

中にいた人物は、私の訪問にひどく驚いている様子だった。「

…神弥卿？」

「二度目まして」

「…どうしてここに…？」

「見学。はいこれ手紙」

言って、私は手紙を格子越しに部屋に投げ込んだ。——あれ。妙だ。なんで手紙を送るのにわざわざ自分で来てるんだろう。握りつぶされると思ったから？——たぶんそれだ。

カルティアは手紙を拾い上げ、じっと見つめる。

「…朝」

「？ はい？」

あれれ。また妙だ。急に朝呼ばわりになった。まあいいんだけど。

「朝」

はいはい、聞こえてるよ。何？ まさか泣く気じゃないでしょうね。やめてよ面倒くさい。

「朝——」

「ええい！ さっさと起きろババア！」

「ぶっ！？」

頭を感じた衝撃と、耳障りな怒声で目が醒めた。焦点の合わない目を瞬くと、すぐ目の前に司が立っている。手に何か白くてでかいものを持っている。——私の枕だ。「返しなさいよ変態！」奪い取る。

「おお、起きたな。おはようございます神弥卿」

「出てけ！ 勝手に寝室に入るな！」

「悪いがコントやつてる暇は無い」

司は私が投げた枕を片手で掴み取り、投げ返してくる。

「チエルヴィングが抜かれた」

枕を受け取り、目を瞬かせる。「…何？」

「言った通りだ。起きろ、神弥卿」

「——どこ？ 国境のラヴィングかレヴィングの塞？ 海路ならブル・ムーンの港あたり？」

「違う。公都だ。テュール・シティが陥ちた」

「……はあ？ なんで？」

なんで外周の防衛拠点をすっ飛ばして、いきなり公都が落ちるんだ。「敵は地竜だ。地中を潜行して公都に奇襲をかけてきた。何回か地震があつたのに気づかなかつたか？ あれは公都攻撃の余震と、王都に向かう敵の移動音だ」

「…マジで？」

「ああ。俺も起きてると思って忍んできたんだがな。お前の神経は鉄骨か」

「——上等じゃない。たまにはスケイドが喜ぶまっとうな仕事をしようじゃないの」

「そういうことだ。敵は地中を潜行してるから、移動速度は速くない。王都に入られる前に充分捕捉できる」

「よし。司、下に行つて全員起こしてきて。五分後に全機B装備で第一射爆場に集合。員数確認後直ちに発進。遅れた奴は置いていくって伝えて」

「分かった」

司が出て行く。私は頬を叩き、自分を叩き起こした。出撃。

十

私の国は、七つの騎士領の中で唯一——つまりは世界で唯一、本格的な竜機兵生産工場を有している。それを利用して結成したのが私の軍団——神弥竜機師団だ。

師団といいながら、そこに所属しているパイロットは私も含めて総勢十五人である。単純に人数だけ見れば一個中隊にも満たない。これは竜機師団に要求される戦闘力を維持しつつ、他の騎士団との

パワーバランスを取れるぎりぎりの線なのだ。これでもまだ、本国は私を優遇してくれていると思う。七騎士団最少人数でありながら、連合最大の戦力、最後の切り札と言われて久しい神弥竜機師団。

現在の竜機師団の標準装備は、私のタラスクスをベースに開発されたマスプロ・モデルだ。オリジナル・モデルと違うのは脚のバーニアが背中に移設されたことと、それに伴って背中の中のエポック・ラックが廃されたこと、両肩の第二腕がハード・ポイントに変更されたこと、標準装備で銃と盾が追加されたことだ。これによってタラスクスの多彩な武装による戦術の柔軟性を維持しつつ、インターフェースを簡略化して操作性の向上にも成功している。これだけ見ると、私のタラスクスより強そうに見える。私もちよつと乗りたい。しかし——私のタラスクスと最も違う点は、竜石を持たないことだ。これだけではどうしても、今の時代の人間の手では複製できなかった。仕方が無いので、マスプロ・モデルは竜石と同じくらいの出力をどうにか人間の手で再現した、竜石よりもずっと大きくて重い反応炉を積んでいる。ナリは同じに見えても、マスプロはオリジナルよりずっと重いのだ。第二腕とウェポン・ラックを外したのもそのせいだ。そんなものを着けたままだと、量産型は重すぎて立てないのだ。

「団長、揃いました」

「うん」

副長の声に、私は後部モニタを見る。背中に翼と増槽、追加バーニアを装着した竜が居並んでいる。竜機兵生産工場では、竜機兵用の武装も開発している。B装備は空対空・空対地戦用装備で、飛竜などの空からの敵と戦う場合、地上からの攻略が困難な拠点を攻撃する場合、戦場が遠くて走っても間に合わない場合などに使用するブーステッド・タラスクス。

その数——十二機。

「副長、欠員は？」

「二名です」

「誰と誰？」

「シドは二日前から腸感冒で病欠。フランは起動途中で竜がフリーズして、再起動中です」

「遅れてもいいから必ず来るように伝えて。私達が抜かれた時、切り札になるかもしれない」

「了解。——聞こえたなフラン！ サボンなよ！」

「は、はい！」

上ずった声が聞こえ、私はタラスクスのメインパワー・スイッチを入れた。B 装備への動力回路開放。主翼展開。B パーツ側主動力始動。

「一、三、四、二、五小隊の順に離陸。二小隊と五小隊は一人少ないんだから、フォローしあってね」

「了解」

「訓示は省略。行くよ」

タラスクスが夜の射爆場を走る。カタパルトがあればいいと思う。本国に予算申請したら通るだろうか。

五歩目でスロットルを押し込んだ。ギアが変わり、脚のバーニアとブーステッド・アフターバーナーに火が入る。飛翔。

「…やだな」

G と神経性の胃痛に耐えながら、団員には絶対聞かせられない咳きを漏らした。

+

星も無い夜を飛翔する。

ふと、タラスクスが微かに震動した。——今日の天気は曇り。雲はあるが風は少ない。気流に揺られたわけじゃなさそうだ。「副長、いたよ」

「は？ ——いや、レーダーには感ありませんが」

「地面に潜ってるからだよ。——でも、タラスクスには視えてる」

時々こういうことがある。ちゃんと確かめたわけじゃないが、どうやら竜石を持つ竜同士は互いを感知できるらしい。私は広角モードにしたモニターに目を凝らす。――遠い山中の溪谷に、地層を破壊しながら進む者の姿が見える。これも普通なら見えないんだろう。タラスクスが視えているものを、モニターにフィードバックしているのだ。

「敵も多分こっちに気づいてる。先手を打つよ」

「待ってください団長。こちらのレーダーには見えません。捕捉できなければ攻撃も何も」

「私が撃つところに撃てばいい。コード発令、AGLA《オール・ガンズ・レディ・フォー・アタック》。フォー101。SOSP―《サスペンド・オン・スナイピング・ポジション》。アクション」
私以外の全機が増槽を棄てた。私のタラスクスは竜石からエネルギー供給を受けるので、もともと増槽はついていない。FCS―《火器管制システム》起動。RWLG―《右翼電磁加速ライフル》展開。自動照準を解除し、手動狙撃モードに切り替える。増速し、敵が視界から消える寸前で急降下する。ビーム・アタック。

「私が撃った位置に全機リニアガンで一斉射撃。敵の足を止める」

「了解」

「位置について。よい」

敵を正面に捉える。突き進む敵――の少し手前に狙いを定める。トリガー。電磁加速された弾丸を撃ち込まれた地面が爆ぜ割れる。直後に引き起こし、急上昇する。

無数の閃光が夜を切り裂き、背後に熱と爆音を感じた。

「よし」

気合を入れる。勝負はここからだ。

脚のバーニアだけを全開にして、タラスクスを空中で半回転させた。同時に敵を捕捉。最大戦速。RWLGのリミッターを解除し、LWMR―《左翼ミサイルランチャー》の全砲門を開放する。トリガー。「団長！」

先程とは比較にならない大爆発が起きた。さっきのは弾丸で地面を掘り返しただけだが、今度は本当に爆発物が混じっている。この全力攻撃は地竜を狙ったものではなく、ただ地面を掘り返すためだけのものだ。爆発と土埃と黒鉛が舞い上がり視界を塞ぐが、私は構わず急降下する。

黒い炎に飛び込む寸前に槍を構え、突き出した。「！」手応えあり。しかし浅い。槍は敵の装甲の上を滑り、私とタラスクスは地面に開いた大穴に墜落した。「…固あ」タラスクスを起き上がらせながら呟く。敵の足は止められたが、ダメージはこちらのほうが大きい。それにしても、あの高さから急降下したタラスクスの槍を止めるとは、敵ながら大した装甲板だ。

黒煙の中から腕が「！！」飛んできた、と思ったら殴り倒された。タラスクスが転倒し——いや、転倒せずに斜めになったままの妙な角度で止まる。壁だ。敵が掘り進み、私と皆が掘り返した穴の壁。

二撃目。「あ！」しまった、と思う暇も無く食らった。今度は壁から引剥がされ、地面に転がる。「つつつ…」

「何やってんです団長」

「うつさい。呆れる間があったら援護してよ」

「リーダーに映ってないつつたでしょうが。しかもこの煙。せめて団長がとつと出てきてくれないと撃てませんよ」

「ああもう、」

避けられなかったわけじゃない。桿は引いたけどタラスクスが動かなかった。動くために必要なバーニアをやられたからだ。壁に背中を打った時に、そこに着けてたB装備を潰された。

だいたい、副長以下の判断が遅すぎる。確かにリーダーが潰れてて曇りの夜間で煙まで立ってちゃ、射撃はまず無理だろう。そんなことはガキでも分かる。だったら格闘戦に切り替えりゃいいじゃない。それも近くに私がいるからできないのか？ それとも私の指示待ち？ 後で何か言われるのが嫌？ 行動しろよ。自分がやらな

いのに他人がやるわけ無いだろ。それとも皆の忠誠は建前だけで、ほんとは私なんかのために戦いたくないのだろうか。まあそれは別にいいんだけど、最悪いいんだけど、栄光の竜機師団が十二人もいて全員棒立ちとは、あまりに格好悪い画ヅラだ。生き残った奴は再教育してやる。

——というのをさっきの「ああもう、」の後に言おうとしたんだけど、今言うことではないので止めた。——ああもう。

タラスクスを起き上がらせ、穴の端まで後退した。断続的な地響きで、操縦席が震える。——足音、なのだろう。黒煙の向こうから敵が出てくる。

オシヤカになったB装備をパージする。「3、4、抜刀。目標に対し急降下攻撃。以降は私と共に格闘戦に移行。1、2、5は空中にて狙撃姿勢で待機。敵が見えたら撃て。1は別命あるまで副長の指揮下に入ること」

「作戦とか無いんですか。ちゃんと計画立てて動いてます？」

「テメエが立てろ。何のためにあんたを副長にしたと思ってんのよ。目の前に敵がいんのに揃いも揃って見学とは楽なお仕事ね」

分かってる。すぐに馬を飛び降りて暴走する私に感化されないように、副長が私の代わりに手綱を持っていてるのは分かってる。——でも、ちょっと頭でっかちなのが玉に瑕だ。理想のパートナーには程遠い。

——？ 私の理想のパートナーってどんなだ？ 「言いましたね、クソ団長」

「さっさと引きずり出してください。クソ蜂の巣にしてやる」

「お、やっとエンジンがかかったねクソ副長」

「あーご兩人。突撃すんのはウチらで決まりなんですかね？」

「やだなー。俺の竜今日吹き上がり甘いんすよね。最後尾でいいつか」

「楽をしようとすんな。テメエの小隊のが番号前だろうが。テメエが先頭取れ」

「いや、番号の問題じゃないと思うんすよね。要は適正とコンディションの問題で」

「イーからやれ！ コード発令！ A G M S《オール・ガンズ・ミッション・スタート》、D O I F《デストロイ・オン・インファイト》！ アタック！」

言った直後、暗い空からエンジンの爆音が近づいてくる。さっきから言っている皆には意味不明の発令コードは、ウチの竜機師団にしか通じない暗号であり、絶対優先命令だ。戦闘中に私がこのコードを唱えたら、誰であろうと何中であろうと、必ず従いすぐさま実行するように教育してある。ウチの校風は悪の秘密結社ばりの鉄と血の結束だ。裏切り者には死を。命令違反、敵前逃亡、利敵行為。どれ一つやってもウチの師団では即撃墜だ。他の騎士団ではもうちよつと、実際に処分するまで色々と正当な手続きを踏むんだろっけど、ウチはそうしない。そうしないと他の騎士団に申し訳無い。

竜機兵に乗った兵士が一人裏切っただけで、戦局が変わってしまう場合があるのだ。

それに、他の騎士団は末端の兵まで合わせれば総勢一万を超えることもあるが、ウチの師団は私を入れても十五人しかない。一人が勝手なことをするだけで、師団全体が窮地に陥ることもある。

爆音が近づき、敵がそちらへ目を向ける。

その瞬間、踏み込んだ。抜刀し、脚のバーニアを噴射して斬りかかる。虚を突かれた敵は、しかしタラスクスの斬撃を片腕をかざして防いだ。やはり恐るべき装甲だ。しかも速い。速度と質量の乗ったその腕の一振りは、タラスクスの斬撃を受け止め、さらにそのままタラスクスを弾き返した。三度穴の底を転がされる。敵は倒れこんだ私を一瞥し、降下してくる三、四小隊に向き直った。301が突っ込んでくる。敵はそれをやはり片腕で受け止め、301は空中で前方宙返りを決めた。そして逆さまの状態で敵の背中にミサイルを撃ち込む。よろめく敵に302、303が斬りかかる。やはり敵の装甲で止められたが、敵を地面に押し倒すことに成功した。四

小隊はそれを見て機首を上げ、一旦空中へ急上昇する。「無駄口の割にはやるね、ザイン！」

「いやいや。よく考えたら近づきさえすりゃ斬り放題撃ち放題じゃないすか。302、303！そのまま押さえてろ！とどめを刺してやる！」

「ミサイルで、ですか」

「俺らまで殺す気じゃないすか。団長何とかしてくださいよ」

「そのまま押さえてて」

「ええええ！？」

二人が叫んだ瞬間、地面が揺れた。「……」私と301はまじまじと正面を見つめる。302と303が——違う。その下の敵が震えている。それだけじゃない。その上体が、少しずつ浮き上がってくる。

「…立つの…？」

「おいおい…マジか…？」

確かに竜としては大きいほうだ。体格はタラスクスの一・五倍強。それに見合ったパワーもある。——しかし、背中に竜機兵を二体も背負った状態で、立てるものだろうか。

そんな私の先入観をよそに、敵は少しずつ上体をもたげ、終には倒れた状態から、地面に片膝を突いた。「うお——！」「た、隊長！」

「なんてパワーだ…！」

「301、射撃用意。敵の上体が完全に起きたところを狙撃。302、303は現状維持。下手に離れると仕返しされるよ」

私は——何ができるだろう。あの重装甲を貫通できるのは、現状の装備ではリニアガンだけだ。私のタラスクスには格闘戦用の武器しかない。敵の急所を突くしかないが——それはどこ？ どうやって突く？

「団長、撃ちます！」

私が考えている間に敵が完全に立ち上がり、301が発砲した。

閃光が、地獄の穴の底に奔る。「……」暗闇と静寂が戻り、私は周囲を確認した。隣の301は——健在。敵の反応もあるが、正面から動いていない。この距離で外すはずはないから、命中した上で動いていないと判断できる。302と303も健在。

「……？」

この二機が妙だった。いや、健在なのはいいことなのだが、動かない。位置からして命中時に敵の上から吹き飛ばされたいが、それならさっさと退避すべきじゃないだろうか。なのにこの二機は振り落とされた位置から動かず、私がこうして考え込んでいる間も動く気配を見せない。「302、303。状況を報告して。破片でも刺さった？」問いかけるが、応答が無い。「……？」

警告音。「……？」上空から誘導熱源多数。「なめんな！」私は回避せず、刀を構えて踏み込んだ。一、二発食らっても問題無い。熱源の速度からそう判断した。速いミサイルというのはつまり軽くて弱い牽制迎撃用のミサイルだ。重くて速いミサイルは自然とサイズが大きくなる。数が少なければそちらも疑うべきだが、この数からするとおそらく違う。それに、私はこの敵は肉弾戦が主体と見た。接近戦で戦うのが狙いの機体に、それほど大量の炸薬を積むのは、それ自体が自殺行為になりかねない。

——後から思えば、私のこの判断が、この作戦が失敗した最大の原因だった。「……！」

二発のミサイルが着弾した。一発は刀で切り落とし、もう一発はそのまま食らう。一瞬タラスクスが減速するが、予想通り振動は小さい。爆発も見えない。見えないということはつまりそれだけ小さい爆発だったということだ。恐れるに足りない。「……そろそろ、終わろうか」呟き、スロットルを引き絞り——

押し込んだ。「……え？」加速しない。

それどころか、振動が無い。バーニアが火を噴かない。「え？え？なんで？」何度かやってみるが、何も起きない。「……嘘。

嘘！」バーニアだけではなかった。腕も、脚も、首も。どこを操作

しても、タラスクスは何も応えない。

「……た、隊長！」

「何すかこれ！ どうなって」

二機の通信が唐突に回復し、303の通信が唐突に途絶えた。正面を見る。

巨大な敵の脚が、303を踏み潰していた。「……嫌。嫌あああ
あ！」私は叫んだ。悲しかったというより、自分のせいで、という
呵責に耐えられず叫んだ。303はシェリーという若い男の子だった。
まだこれからだったのに。ザインなどは弟のようにいじり回し
ていたのに。

涙など出なかった。戦闘中だ。

その代わりに、モニターの上から落ちてくる液体があった。

「……！」

白い。透明度は低い、半固体のようにどろりとはしていない。さらさらしてて水に近い。それは広がり、モニターを白く染めていく。
半分白く染まったモニターの向こうで、敵が私に振り向いた。

「……！」

必死に桿を倒すが、タラスクスは動かない。

敵は一瞬で目の前に現れ、「……！」巨大な腕でタラスクスの腹——
私がいる辺りを打ち据えた。直後にもう一度衝撃。背中から壁に叩きつけられたらしい。

私はシートに後頭部を痛打し、急激に意識を失いつつあった。
誰かが何か言っている。私も言わなければ。あれはコーキング・ラン
チャーだ。敵のミサイルに当たってはいけない。でも撃ち落とす
てもいけない。私みたいにコーキング剤を頭から被る羽目になる。
あれの対処法は、たった一つ——

私が意識を取り戻したのは、ずっと後——敵が戦域から離脱し、
作戦が失敗した後だった。

「…はあ？」

ウオラギネ宰相は、見た目もジジイだが中身もジジイだ。言葉の乱れは心の乱れ、がモットーで、私達騎士に対しても服装や言葉遣いや立ち居振る舞いに関して厳しい。普段の振る舞いや自分の国に帰ってからの部分は目を瞑るから、自分の目につく範囲ではまともにしてろ、ということだそう。前に説教食らったときにそんな主旨のことを言っていた。その代わり宰相自身もちゃんとしている。そんな宰相が「…はあ？」なんてリアクションをする辺り、相当トサカに來ているであろう事が推察できる。

「つまり、撃破できなかったのか」

「はい」

「逃げられたのか」

「はい」

「この親政領に入られたかも知れんのか」

「はい」

「馬鹿が！」

この問答いつまで続けんだよ、と思った頃、ウオラギネ宰相が爆発した。「貴様一人が負けたのならいい。いやよくはないが。しかし実際は貴様一人で当たったわけではなからう？ 貴様の竜機師団全軍で出撃して、十五対一で負けたのだろうか？ 信じられん。どういう指揮だ。やる気はあるのか！」

「申し訳ありません宰相。私の力不足です」

「黙れ！ 私の問いに答えろ！ やる気があるのかと訊いている！」
二人欠員がいたんで実際は十三対一ですが、などとは口が裂けても言えない。——言えるような世界で生きてる人は幸せだと思う。そんな世界無いだろうけど。

聞こえないようにため息を吐き、考え、答えた。やる気だつて？ お前よりはあるよ、文官。「会敵から二分十七秒までは、順調に推移していたと考えます。敵の動きを止めることに成功しました

ので、部下に至近距離での狙撃を指示しましたが、敵がコーキング・ランチャーを使用したために、一瞬全隊の機動が乱れました」

「…コーキング、何だ？」

「報告書に書いてございます」

「ふん」

ウオラギネは手に持っている資料をぱらぱらとめくった。私が筋肉痛に痛む身体を酷使し、心配してくれるスケイドや司に八つ当たりしながら徹夜で書き上げたものだ。それから無事帰投した部下を労い、医師長に被弾した部下の具合を聞き、私達の機を急ピッチで整備している整備課の皆さんに慌しく挨拶と謝罪を済ませ、朝一番の汽車に飛び乗って執政宮に参上し、こうしてバカ陛下の前に跪いて宰相の説教を食らってやっている。

やる気だつて？ 「書いていないが？」

「最後のページの脚注3です」

「ふむ」

ちゃんと読めや。「…充填剤？」

「パテとも申します。建造物等の壁や柱の隙間に充填し、瞬時に硬化させるものです」

「そんなものにやられたのか」

「ベークライトと違うのは、硬化するまでに粘着性を発揮するということです。外側を固めるだけであればどちらを使用しても同じですが、対象物を内側から固める場合、コーキング剤は駆動系の細かい隙間まで侵入し、充填剤と同時に接着剤の役目も果たし、竜機兵の駆動系を完全に圧殺します。また、ベークライトと違い電気的特性がありませんので、電装系にも損害を与えることが可能です」

「…そこまでわかっておるのなら、対処法も当然あるのだろうな」

「いいえ、宰相。現状の装備では対処不能です」

「何だと！」

「最善の策は全弾を回避することですが、これは現実的に不可能です。また、コーキング剤の性質上、撃ち落とすわけにもいきません」

「——それで？　また敵が現れたらどうするのだ。また同じようにやられるのか？」

「それしかありません」

「ふざけるな！　それでも貴様は聖王守護騎士団か！　次に敵が現れるときは、必ずこの聖王親政府が戦場となる！　王と民が危険に晒されるのだぞ！　わかっておるのか！」

私は頭を垂れたまま、腕の袖を肘までまくり、逆の腕でナイフを取り出した。「……！？」宰相と、御簾の向こうの陛下の表情が変わったのがわかる。裸の腕と、ナイフを逆手に握った腕を連中によく見えるように頭上に掲げ、

突き立てた。「……」血は出ない。ナイフを引き抜く。かしゃ、と音がして、引っ込んでいた刃が柄から飛び出してくる。昔の玩具だ。ビビツたか、宰相め。

「回避できない弾は、受け止めるしかありません。敵の弾を腕で受け、コーキング剤が全身に回る前にその腕を切り落とす。この方法なら、二回まで敵の攻撃を相殺できます」

「——で、敵のたった一発の弾と、自分の腕一本を交換するだと？　それが対処法か？　だいたい、そのために片腕を失っては戦闘力が大きく低下するであろう。しかも腕は二本しか」

宰相はそこまで言って止まった。わかったらしい。「……神弥卿」

御簾の向こうで、陛下が口を開く。

「卿は、一人で敵に挑むつもりか？」

「……」

……バカ陛下の割には、勘がいい。「私のタラスクスには、腕が四本ございます。新兵器が間に合わない場合は、私が迎撃を行います」「新兵器だと？」

「現在、被弾した機体の弾痕から敵ミサイルの貫通力を測定し、それを防ぎ得る強度の盾を製作させています。また、同じ主旨の全身用リアクティブ・アーマーの開発も進めております。名づけてA装備、アーマード・タラスクス。これが完成すれば、敵の攻撃など恐

るに足りません」

——暫し、会話に間が空いた。宰相あたりは私を詰める二の句を探していたのだろうが、見つからなかったのだろう。馬鹿が。あなたが私の手落ちを追求する言葉を考えている間、私は自分を生き残らせ、敵を殺す手段を考えてるんだ。やる気だつて？

「…それで、それが完成するのは？」

おお、馬鹿がやっと喋りだした。「盾はすでに鑄造に入っておりますので、三日も頂ければ充分です。鎧に関してはまだ設計段階です。完成には二週間程度必要かと」

「遅い。一週間以内に完成させよ」

「御意」

馬鹿が。始めから一週間の予定だよ。「神弥卿」

私が答えた直後、陛下が口を開いた。「はい、陛下」

「ウオラギネではないが、急ぐように。敵がいつ襲ってくるかわからぬ。次はこの聖都かも知れぬ。ウオラギネが貴公に辛く当たるのも、我が臣民を護れるのは貴公のみと思うからこそである」

「——陛下。そのご心配には及びません」

「何と？」

「敵は少なからず手傷を負っています。そして我が竜機師団を抜きはしましたが、殲滅したわけではありません。私が敵で、目的が聖都攻略ならば、万全の状態でなければとても決行など出来ません。敵が体勢を整えるまで、まだいくばくかの猶予があるはずです」

「待て。それは貴公の理屈だろう。それが敵にも通用する根拠はあるのか？」

ウオラギネが口を挟み、私は即答する。「はい。敵は私と同じ理屈で動いているはずです」「何？」

「神弥卿。それは、つまり」

陛下が口を開く。微かに声が震えているのは、事の重大さを悟ったからか。

「根拠は、前回の戦闘時の敵の動きです。コーキング・ランチャー

使用時、敵が撃った弾は十八発。そのうち十二発は敵に取り付いていた部下の機に着弾し、残りの六発が私に向かってきました。つまり、私の機が指揮官機だと見抜き、私を最優先でロックオンしていたのです。訓練を受けたものでなければ、できることはありませんん」

「そうか？ 貴公のタラスクスと部下のタラスクスはモデルが違うのだろう？ 見た目で判断したのではないか？」

「いいえ、宰相。作戦時刻は夜、気候は曇り。目視で敵を判別するのは不可能です。敵は私の機の見た目も挙動も見えない状態で、私を頭だと見抜いた」

「……！」

「敵は正規の訓練を受けた軍人です。それも錬度の高さから見て、おそらくは実戦経験者。騎士の誰かの謀反を疑わないなら、結論は一つ——他国からの侵略者です」

+

陛下が部下からの報告を受ける時——あるいは、今日みたいに失敗した部下に軽い査問を食らわせる時に使う謁見室は、ドレイク執政宮の最上階、その最奥部にある。謁見室の前には一本の長い廊下があり、それが右折するところにあるドアを開けると、コルネルで空と仕切られた小さな空間——展望台がある。

「……ふう」

ここに展望台をつけた奴は天才だ。

青い空と吹きぬける風、微かに聞こえてくる城下町の喧騒は、査問で疲れきった私の心を優しく癒してくれる。「ここだったか」

「……お帰り」

渋りきった声と共に、渋りきった顔の男がドアを開けて展望台に出てきた。皺が寄り、髪も髭も真っ白に染まり、痩せこけた顔は老人と呼んで差し支えないものだが、その眼光は死神すら追い返し

ねない生氣と迫力に満ちている。

ヤノシユ・ニアディアス・チエルヴィング。聖王守護騎士団主席にして、チエルヴィング剣士団々長。騎士団最高齢ながら、生身での戦いなら文句無しに騎士団最強のジジイだ。

——ごめん一個嘘ついた。ツッコまれる前に自首します。最高齢はこいつじゃない。——私だ。「どうだった？ 怒られた？」

「……お前、一体どういう答弁をしたんだ」

場を和ませようと思ってつとめて明るく声をかける私に、ヤノシユは渋い声で返してきた。いつも通り眼光は鋭いが、相当こつてりと絞られたのか、その眼光が暗くてじめつとしている。

「どういうつて。こないだ言われた通りにやったわよ。自分の非を素直に認めて謝罪して、現状を客観的に分析して、それに対する善後策も提示して」

「……それを全部やったのか」

「やったけど。何？ 何言われたの？」

ヤノシユは一つため息を吐く。一応主席と次席なので、ヤノシユの方が私より気持ち立場は上なのだが、私とヤノシユの間にはそんな微妙な立場の壁は無い。私とヤノシユは聖戦時代からの戦友だ。私は延命処置を受けて時が止まったが、ヤノシユは普通に歳を取った。あの戦争で私と一緒に戦った事がある人間は、もうこのヤノシユしか残っていない。

「貴様らは主席と次席でありながら、事の重大さを理解しておるのか。神弥あたりは他国の侵略だとか言っていたが、仮にそうでなくとも貴様ら二人が易々敵の侵入を許したというのでは他国に侮られるであろうが。それを貴様らはろくな反省も無く、それどころかまるで想定範囲内とも言わんばかりだ。貴様は主席として神弥にどういう指導をしておるのだ。だそうだ」

「……長いよヤノシユ。要約してよ」

「俺なりに目一杯要約してこの長さだ。もっと要約しろというなら——つまり、ふざけんな能無し、ということだ」

「能無し？　じゃあ私が良かれと思って言ったこともやっつてること
も一切評価されてないってこと？　上等だわ。全作戦放棄して休暇
とってやるのかな」

「お前は俺に死ねと言っているのか？」

「宰相の説教ぐらいで死にやしないでしょ」

「もつと現実的な意味でだ。俺一人であの竜の迎撃に立てと言っ
のか？　昨夜から腰が痛いんだよ腰が」

「失礼します」

別の声が割り込んできた。ドアの方を見やると、でかい包みを携
え、エプロンドレスに身を包んだ少女が立っている。――私を見て、
居住まいを正した。「お話中、でしたか？」

「よくここが判ったな」

「下に居なければ、上に居るものと思ひまして」

「ふん。何の用だ」

「……いや、閣下が遅いので見に来たまでですが」

「子供じゃあるまいし。煙草もゆっくり吸えんのか」

少女はあからさまなため息を吐き、ヤノシュに歩み寄る。目の前
まで来たところで片膝を突き、包みを両手で捧げ持った。

「剣が戻りましてございます」

「……ん」

ヤノシュは包みを受け取り、解く。艶やかな刀身が、陽光を反射
して鈍く煌いた。シルエツトはごく普通の剣に見えるが、見る奴が
見れば全然違うことは一目でわかる。鈍く光る刀身は通常刀剣には
使われない金属のものだし、その刀身に刻まれているのはこの時代
の人間には解読できない古代の術式。鍔元に収まっている宝玉だっ
て、巷に出回っている宝石のどれとも違う『何か』だ。竜殺しの剣
『破量剣』。対象の質量を減退させることで構成物質の密度を低減
させ、斬る。質量を減らせるので斬らずとも、ヤノシュのようなジ
ジイが巨大な竜を蹴り倒すことも可能になる。防御に転用すれば実
体弾の質量を消して無効化する、あるいは逆に滅茶苦茶重くして自

分に届く前に地面に落とすことも可能——という、クソふざけた魔剣だ。反則でしょ。こんなの振り回されたら私だって勝てない。

——はずなんだけど。「何、折ったの？ ダサッ」

「欠けただけだ。こうして直った。何も問題無い」

「いやいやいやあるでしょあるでしょ。重量級の竜に対してその重量を無力化できる剣を使っておきながら、勝てないばかりか損傷を受けるってどういう事よ。そりや言われるわよ」

「足場が悪かったただけだ。次は仕留める」

「足場つてのは街の事？ ここで迎撃するんだったら次回も同じことじゃない」

「——なら、お前はどうする気だ？ 確かに敵は地中を移動するというアドバンテージを得ている。あの能力の前にはどんな防衛線も無駄だ。次に敵が襲撃をかけるとすれば——ここだ。全ての中継拠点を無視して、本陣を討つのが最も速く、効果も高い。宰相に指摘されるまでもなく、次はこの聖都が戦場になる。その時お前はどいうする気だ？ この街が破壊されるのも構わず、タラスクスの全力攻撃で敵を粉碎するのか？」

——言われた。それこそが、次の戦闘の最大の課題だった。あれだけの敵、犠牲を払わずに倒すのは無理だ。かといってそれを罪なき民に強いるのか。もちろん陛下やウオラギネはそれを看過はしない。戦で財産を喪った民にはできる限りの保障をするだろう。でも、いくら後で保障するといったって、自分が積み上げてきたものが一瞬にして、自分には何の落ち度もないのに打ち壊される絶望は、何者をもつても埋められない。私の心でさえまだ埋まっていけない。

でも、私は考えなければならない。聖ドレイク連合はこの聖都だけではない。たとえ聖王親政府が陥ちても、残りの七つの騎士領が残っていれば、それを復興するのは容易だ。私は単なる聖都近衛ではなく、連合全体を護る騎士の一人なのだ。本当に陛下や宰相が私にそうあることを要求しているなら、私は決断しなければならぬ。陛下や聖都ではなく、この国そのものを護るために。

「胃が痛い。」「あんたは」「うん？」

「いつから女の子にメイド服を着せて喜ぶ男になったの？」

「話を逸らすな」

ヤノシユはため息と共に言った。わかってる。こんな風に逃げるのは騎士の名にもとる行為だ。ヤノシユはともかく、宰相には通用しない。

でも。

ヤノシユに通用して宰相に通用しないのは、宰相は私がすでに答えを用意しているのを知らないからだ。そして、その答えを知って、おそらくそれを許さないから。

「重要な問題よ、これは。こんな可愛い子をメイドに仕立てて傍に置くなんて、とうとうその方面に目覚めたの？ 情けないわ。昔のあんたは一匹狼で、あんなに硬派な剣闘士だったのに」

「お前のところにも使用人ぐらいいるだろう。必要だから雇用しているだけだ。お前だってどうせスケイドには執事服を着させているんだろうが。いやあいつはむしろ自分から着るか。それからお前、彼女のような格好の女性をメイドと呼ぶな。正しい呼称はメイドさん、だ」

「あ、あの」

少女の声が割って入った。私とヤノシユは同時に彼女を見る。心なしか顔が赤い。自分をネタにケンカされるのが嫌だったのだろう。閣下、そろそろ本当に時間が」

「お前もいい加減に覚える。俺のことはご主人様、と呼べ」

「嫌です」

「何故嫌なのだ。俺が雇用主でお前が使用人であることを考えればむしろ当然の呼称ではないか。むしろ閣下というのは軍職にあるものが上官を呼ぶ時に使う呼称であって、むしろお前がそれを使うことのほうが間違っている。ラタトスクなど待たせておけ。煙草一本吸ったら降りる」

「え？ ラタトスクも来てるの？」

「ああ。何のためかは知らん。特殊戦の権限を盾に取られてな」

ラタトスク特殊戦隊というのは、他の六つの騎士団と違って、戦うことを生業としていない。実際の戦場では主に後方支援、補給戦の確保や本陣の設営、情報伝達を担当している。——と、表向きにはそうなっている。なので、大きな戦闘になった時にあのツリ目出来杉瓶底眼鏡が支援に来てくれるというのは、素直に助かる。何しろ他人の金で補給ができるのだ。

——しかし、それは大きな戦闘になった時の話だ。たとえば次の戦闘がここで、主に戦うのが私とヤノシユの二人だけだった場合、彼女の存在がどこまで助けになるかは甚だ疑問だ。私もヤノシユも、今回は手勢は連れてきていない。いたところで怪我人ばかりで使えないし、私のお供をするよりも自国の復旧と防衛が第一だからだ。

——私達の手伝いをするのでないとしたら、何故ラタトスクはここに来たのだろう？

ヤノシユに、何の話があるのだろう？

「…どうでもいいか」

「何？」

「どーでもいいわ。私には関係無いし。あつたとしても、私のやることは変わらないもの」

「おい。どこへ行く気だ」

「帰る帰る」

ドアを開け、展望台を出る。

——答えは出ている。最初から。いや、それ以外の答えなどありえない。

戦うためにここに来たのなら、それ以外の答えなどありえない。その答えを出すのに、いちいち私は悩んだりしない。そんなセンチメンタルは棄てた。

私がかマトトぶって悩んだところで、どうせ自分の責任から逃れるための時間稼ぎだと言われるだけだ。

——胃が痛い。

+

帰る帰る、と言ったが、もちろん自領に帰るわけじゃない。しばらくは聖都に逗留して、敵の出方を見る。

——すぐには来ない、と陛下に言った言葉は嘘じゃない。少なくとも私ならやらない。——しかし、じゃあいつ来るのか？　が判らない。

補給をどこでするのか、という疑問も消えていない。消耗した弾薬をどこで補充するのか。まさか自国まで戻るわけではないだろう。地中を進む力は侵攻戦には絶大な威力を発揮するが、それだけだ。行く先々で地震を起こしていたら自分の位置を知らせるようなものだ。——それが無いということは、敵はそれほど遠くへは逃げていない。今もどこかで虎視眈々と、この聖都を落とす機会を窺っている。——いやそれはわかった。それで、補給は？　「こんにちわー」

「いらつしゃいませ」

私はいつも使っているホテルに入った。出迎えのフロントも顔馴染みだ。「部屋、空いてる？」

「申し訳ありません神弥様。本日はもう満室でして」

「ええ？　このホテルそんなに流行ってたっけ？」

「微妙にひどいことを言われながらもお陰様で満室でございます。

何しろシーズン中なもので」

「あつそ」

「神弥様こそどうされたのです？　普段はご予約を頂いてたと思いますが」

「うん……」

バカ陛下に緊急で呼び出されたの。自分がミスった分の説教食らいに。

なんてかつこ悪くて言えない。「スケイドが風邪引いてね」「ごめんスケイド。」

「ああ。それはお気の毒ですね」

「そうなのよ。あいつがいけないともう全然回らなくて」

「いや、スケイド様が、ですが」

「何だとフロント」

私が定宿にしているこのホテルは、頭にロイヤルとかプリンスとかがついていない普通のビジネスホテルだ。スケイドが出張費を豪快に削減してくれたせいで、こんなホテルにしか泊まれない。他の連中がどうしてるかは知らない。経理と上手くやっていいホテルに泊まつてるかもしれないし、ひよっとすると妾宅でもあるのかもしれない。

——ただ、一人だけは知っている。さっきも話に出たアストレア・フォロン・ラタトスク。

彼女は、聖王宮内に自分の宿舎を持っている。「さて、どうしたもんなかな……」

「よければ、お世話致しましょうか？」

「お部屋を用意されておられないのですか？」

「急だったからね」

「あの、ですから」

「それはまずい。ちょうど今の時期はどこも塞がってます。巡礼者が増える時期ですから」

「うん。まずいまずい……」

「あの、そこですね」

「私の方で知り合いを当たっても構いませんが、おそらくもうどこも……」

「いいよそこまでしてもらわなくても。——ラブホとかなら空いてるかな」

「……うつつ」

「いや、神弥卿。市井の私が言うのもなんですが、さすがにそれは」

「いや、郊外とかで取ってもいいんだけどさ、それだと有事の時の対応が遅れるのね」

「それでラブホですか？ 騎士である神弥様が」

「なかなかの奇策だと思わない？」

[illegible]

「お止めください。というかもっとご自愛ください」

「別にいいよ。私そういうの気にしないし」

「いや、ラブホがどうか、それがスケイド様に知れたらどうなるか」

「あー……気にしそうだなああいつ」

二人してため息を吐く。――しばらく無言。

やがて私は、さっきからうるさい背後を振り返った。

「というわけで、ごめん、お世話してくれる？」

「気づいてたんですか」

「いい手が見つかったらこのままスルーしようと思ったんだけど」

むくれた顔がかわいい。

ヤノシユが連れてきていたメイド——さん、だった。

†

「ねえ、お世話してくれるんじゃないの？」

「そうでしたっけ？」

「ごめんってば。お願いだから助けてよ。メイドさん」

「誰をなんでどういう風に助けるんですか？」

「だから、部屋探してくれるって」

「言いましたっけ？」

「メイドさん、部屋を探してください」

「それが人に物を頼む態度ですか？」

「いいじゃない、探してよ」

「イヤです」

「探しなさいよ」

「うっさい」

「探せ、我が忠実なる下僕よ！」

「なんで徐々に偉そうになるんですか！」

そこでやっとメイドさんがこっちに振り向いた。「いや、メイドさんだから、命令されるのが好きなんじゃないかなと」

「大変な差別発言ですね。支配階級のエゴですよ」

「え、だって、そういうの好きだからメイドさんやってるんじゃないの？」

「見くびらないください。私には夢があるんです。いつかお金を貯めて独り立ちして、ケーキ屋さんをやって両親と幸せに暮らすんです」

「マジで？」

「嘘です」

「嘘じゃん」

そこでメイドさんが前に向き直って歩き出したので、私もそれについて行く。「ヤノシユはラトと会談中？」

「だと思えます」

「内容は——知らないよねえ」

「知りませんけど——ラトスク卿が来た理由はわかります」

「え——マジで？」

「はい。——あれ。神弥卿はわからないんですか？」

「全然」

「……」

メイドさんが振り向き、にやりと笑う。「教えましょうか？」

「……よかったら」

「……うーん」

メイドさんは周囲を見回し——一点で視線を止めた。路上に停ま

っている、屋台のクレープ。「あー。何か甘いものが食べたいな！」
「…貴女、マジなの？」

「言っただけですよ私は。何も要求してません？」

「ケーキ屋志望のメイドさんの分際で、私からおやつをたかろうつて言っの？」

「別にたかる気は無いですけどお——寛大なお心の騎士様なら、おやつの一つくらいけちけちないですよねえ」

「…何味」

「いちご生クリーム」

「重」

「つべこべいわんと買ってこい」

「…」

財布を確認し、屋台に向かう。「買え！ 我が忠実なる下僕よ！」

「その台詞は容認しないわよ！」「…いちご一つ、でよろしいですか？」「…あとチョコバナナ」「はい」よかった。このクレープ屋は私が何者かわかってない。メイドにおやつをたかられる騎士の図——なんて、さすがにマズ過ぎる。威信もへったくれもあったんじゃない。「はい」「ゴチになりまーす」

「…で？ ラトは一体何しに来たの」

「炊き出しですよ」

「——え？」

クレープにかぶりつきながら、メイドさんは横目で私を見る。「だって、閣下も神弥卿も、結局はここで戦う気なんでしょう？」

「…」

「きっと、陛下もそれはわかってたんですよ。だからラトスク卿が呼ばれたんです。焼き出された民を、街が復興するまでの間食べさせるために」

「……そうなのかな」

「違っんですか？」

「…」

違わないと思う。考えてみればすぐ当たり前で理になつた回答だ。壊れるのが分かっているなら、それに対する備えをしておけばいい。

——だとすると、どうなるんだろう。「えーと……」

「？ どうしたんですか？」

私が聖都にいて、ヤノシユがいるのも敵は多分知ってる。ラタトスクがいるのも多分知ってる。だってこのメイドさんが知ってるくらいなもの。ということは、敵は私達がこの聖都で敵を迎え撃つ気だというのも分かるはずだ。——するとどうなる？ 敵の裏をかくのは戦術の基本だ。奇襲の場合ならなおさら。敵が一番手薄なところを、敵が予期しないタイミングで急襲する。

——どこから来る？ 「あ」「？」

「いや、違うか」

「??」

聖ドレイク連合王国で今一番手薄なのは、ぶつちぎりでヤノシユのチエルヴィング公国だ。首都が半壊して剣士団が全員その復旧にかかっている。指揮官もいない。次が私の国だろう。——でも、敵はたぶんどちらにも仕掛けない。

指揮官がいないのは同じだが、ウチはまだまだ。三番隊のシエリーが欠けただけだから。自領に被害が出ていないからどこを攻められても迎撃に回れる。首都に來られても同じだ。スケイドもいるし。ウチの城にはスケイドが自分で育てた自慢の守備隊がいる。何でもヤノシユの剣士団と同じ訓練を課しているそうで、頭数ではともかく一人一人の実力は剣士団とそう変わらないらしい。ほんとかなあ。まあ今は信じるしかないけど。

次に第一候補のチエルヴィング公国だけど——ここはもっと無い。攻めるところが無い。首都はもう攻めたから意味が無いし、それ以外の場所も戦略的価値があまり無い。あるとすれば地竜が後方を攪乱している間に国境の塞を正面突破——という線だろうけど、そんなことをするぐらいなら始めから地竜で塞を落として、そこか

ら着実に進軍した方が時間が掛からないのだ。わざわざ初めに首都を落とす意味が無い。——なんで最初が首都だったんだろう？」

「——だめだ。わかんないや」

「え？ だから炊き出しですってば」

「え？」

思わず彼女を見る。彼女もまじまじと私を見ている。「……大丈夫ですか？」そして訊かれた。心配されている、らしい。「……ぷ」

「く、くつくつく……」

「え、ええ？ なんで笑うんですか？」

思わず笑ってしまった。メイドさんはわけが分からずうつろたえている。込み入っていた頭に、「炊き出し」がツボに入ってしまった。しばらく笑いが止まらない。

大丈夫なわけ、無いじゃないか。

+

メイドさんが拾った辻馬車は、私と彼女を郊外の森まで運び、さらにそこを抜けて小高い丘までやって来た。「出すよ」「いいですよ」「いいから」「いいです。私タダ券ありますから」「え？ そんなのあんの？」「知らないんですか？ あそこの商店街で買い物するとタダ券もらえるんですよ」「知るわけ無いじゃん」「支配階級め」「……」

「……で、ここ、何なの？」

これで古式ゆかしい城砦とか、瀟洒な洋館とかが建ってたらファンタジーなんだろうけど、あいにく私の目の前にあったのは小さなログハウスだった。何の飾り気も無い。まるで山小屋だ。

「ヤノシユ様の別荘です」

「——別荘？ にしちゃ」

「質素なお好みなんです、閣下は」

「だからって」

半分は納得できる。都に來た時にちよつと寝るだけなら、小屋でも城でも変わらない。壁のほとんどがガラス戸で天井まで吹き抜けになっているのは、どこから刺客が來ても発見するためだ。飾り氣が無いのも隠れるのではなく、自分の視界を確保するため。ルートを絞つて援軍が來るまで持ちこたえるのではなく、全方向にルートを用意してどこからでも突破できる構えだ。あいつらしい。

「——らしいけど、騎士の別宅としてはどうよ」

「そもそも別宅を持つてない方の言う事ですか」

メイドさんを見る。——そろそろ敬称を使うのが面倒くさくなつてきた。「貴女、名前は？」

「おそ」

「？ オソ？」

「遅」

「……」

メイドさんは入り口に近づき、鍵を開ける。「はい、どうぞー」

「……」

だから、名前、教えろや。

+

「……けど、やっぱりおかしくない？」

「何がですか？」

小屋の中にはほとんど何も無かつた。ベッドが一つとテーブルが一セット。あとは家具類は何も無い。着替えを入れるようなクローゼットも無い。

ここで着替えることは想定してないか、視界を確保するためなんだろうけど——

「私がここで寝るとしたら、ヤノシユ本人はどうするのよ」

「ラタトスク卿にお世話になるそうですよ？」

「——え？」

それはおかしい。そんなことができるんなら、ラトに私を押し付けて自分は自分の寢床で寝ればいいのだ。なんでわざわざそんなことをするんだ。

——え？ マジで？ 「え？ そうなの？」

「そうなんですよ。——え、知らなかったんですか？」

「知るわけ無いでしょ！ あのジジイ何やってんの！？」

「同年代なのに、神弥卿とはケタ外れですよ。甲斐性が」

「そういう問題ではなく！」

「そういう問題ですよ」

言い切り、メイドさんは私をきょとん顔で見つめる。私は脳をフル回転させて最も適切かつ強力な反論を探したが——不意にやる気が無くなって、一つしかないベッドに座り込んだ。「何考えてんのよ……」

「神弥卿は無いんですか？ そうなの」

「無いね」

「えー。せつかくのツンデレなのに」

「……ふっ……」

「何ですかその笑い」

「別に」

ベッドに寝転び、メイドさんに背を向ける。ツンデレだってどうにもならないことはある。私は見た目は若く見えても、もう百歳を過ぎたお婆ちゃんだ。その正体を知っていれば、粉をかけてくる男もない。それに皆が、私が今までしてきたことを知っている。堆く積み上がった栄誉という名の黒い重石は、私をその高みに登らせるのではなく、私の目の前に壁となって立ち塞がっている。

私が本当にやり直したい青春は、きっと、その向こうにあるのに。「……？」視界が軽く揺れる。「じゃあ、狙っちゃおうかな」声が、すぐ後ろから聞こえる。

「……いいよ」

「お。まさかの一発オツケー？」

「じゃなくて。氣い遣わなくていいよ。自覚してるから」

「確かに神弥卿って、男より女の子の方にモテそうですね。今までそういうの無かったですか？」

「無いよ」

「あつたら、どうします？」

「無いってば。私はもうお婆ちゃんだから、そういうのは無いの」
「……」

メイドさんの指が私の耳に触れ、耳たぶを摘み――

思い切り上につねられた。「痛い痛い痛い痛い痛い」

「痛い！ 何すんの！」

「――ぷっ」

吹き出し、メイドさんは寝転んだまま爆笑し始めた。「笑うな！」

「そ」

「そんないりアクションする人を、お婆ちゃんとは言いませんよ」
「――」

メイドさんは笑いを収め、間近で私を見つめる。「――」

メイドさんの両手に、私の頬が包まれる。「神弥卿のところに転職しようかな」「…要らないよ」「要らなくても、行きます」「ダメだつて」「ダメですか」「ダメ」「絶対？」「絶対」

「神弥卿」

「何」

「神弥卿は、充分魅力的ですよ。自信持たなきゃ」

「…持つてるよ」

「本当に？」

「本当だよ。――でも」

「でも？」

負けるつもりは無かった。

こんな子供騙しの慰めの言葉に引つかるほど、甘い人生は送ってないつもりだった。

でも――どうしてだろう。

どうしかはわからない。

どうしてかはわからないけど、この時だけ、私の心は——折れた。「でも」

「私が自信を持っても——誰も分かってくれない——」
呟き、俯く。

メイドさんの手が私の顔を上げさせ——唇が、触れ合った。

「——無いつて、言ってるじゃん」

「やらしくないですよ。おまじないです。神弥卿が、勇気を持てるように」

「——」

もう一度、唇を交わす。

やらしくないと言う割には、そのキスは長く、甘かった。

？ ・もしもあなたが愛する人に打たれたら（後書き）

というわけで第三話Aパートです。

もうお分かり頂けたと思います。朝が抱えているサブタイ以外の性癖とは、——です。しかも天性の浮気性。小衣はどうした！？

次回は第三話Bパートです。そして勘のいい読者様なら、この後の展開も概ね予想がついていることと思います。聖都を襲う敵の正体とは。いつにない本気度で迫る朝の激闘に、

ご期待ください——というかもうやっています。ご検索ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8793p/>

タラスクス～朝の病名～? - 1

2011年1月8日21時58分発行